

文法モデルの構築および意味的選択体系網の記述

船本 弘史\*

Modelling Grammar and the Description of Semantic System Network

Hiroshi Funamoto\*

北 陸 大 学 紀 要

第39号 (2015年11月) 抜刷

# 文法モデルの構築および意味的選択体系網の記述

船本 弘史\*

Modelling Grammar and the Description of Semantic System Network

Hiroshi Funamoto\*

*Received May 11, 2015*

## Abstract

The ‘privileged’ situation of English-speaking world (Halliday 1994: xxx) has made English the most studied language in the world. Indeed, it is no doubt that the existence of alternative versions of SFG for English demonstrates the development of Systemic Functional tradition in depth both qualitatively and quantitatively. In fact, on entering Phase 5 of the COMMUNAL Project in 2002, as developed by Fawcett and other scholars, Fawcett (2002) makes it clear that ‘this already very large generative lexicogrammar has the potential to be [...] the largest fully integrated, operational model of any language in the world’. Along this line, it may be possible to say that researches on Japanese has the potential to be invaluable in its contributions to SFL in the global trend. The aim of this presentation is to make an attempt to show the way, in broad terms, to advancing step by step from one stage to the next in developing the Japanese version of Systemic Functional Grammar, which I refer to specifically as a ‘proper grammar’.

To do this, the present study will be to pinpoint the major problems that we currently face in describing Japanese grammar in terms of SFL. Some are derived from applying the method of ‘transfer comparison’ to the description of Japanese grammar, which may cause certain difficulties in developing a ‘homegrown’ framework for analyzing natural text (as Eggins and Slade 1997 does for English). Yet, more importantly, other problems reside in the lack of the integral model of human communication that handles the whole processes of meaning-making in a specific language.

## 1 本研究の目的と範囲

本論文の第 1 の目的は、選択体系機能言語学（Systemic Functional Linguistics、以下 SFL）における個別言語研究のあり方を考察し、英語以外——本論では特に日本語——の

---

\*未来創造学部 School of Future Learning

文法をその実相に即して記述するためのモデル（ここでは「連動循環モデル」と呼ぶ）を提示することである<sup>1</sup>。SFL は、理論、記述、応用という 3 つの側面がそれぞれの実践をとおして互いに影響しあいながら発展してきた。そして 21 世紀を迎え、コンピュータ技術の急速な普及など、言語学者をとりまく環境は劇的に変化をとげ、言語および言語使用に関する理解も深まりと広がりを見せている。そのようななかで、Halliday が強調するキーワードのひとつに（「応用 (applied)」でも「適当 (applicable)」でもない）「実現可能 (appliable)」言語学という概念がある<sup>2</sup>。

言語学がつねにそれ自体の「あり方が問われる学問」であるのは、ことばが社会を突き動かすだけのすさまじいエネルギーを秘め、またそうであるがゆえに、ことばとその理論は常に社会の要請にこたえるべく実践され進化しつづけなければならないからである。SFL 理論は、この必定の課題を抱えながら、多様な目的の実現のために使用されるようデザインされてきた。後述するように、SFL は、言語研究における理論と記述を明確に分離し、理論が（たとえば個別言語の記述といった）特定の目的を達するために、個々の現象を一般的な原理へと向かわせる「鑄型」となることはない。

その点、英語はそれ自身が言語学の研究対象のひとつでありながら、言語学の実践そのものにおいて「グローバルな伝達手段 (global medium of communication)」として活用される特殊な言語であると言える。これは SFL の発展においても例外ではない。このような状況の中で、Halliday が唱える「実現可能言語学」を実現するために、英語以外の個別言語が SFL の発展にどのように関わり、また貢献できるかは、これから考えるべき重要課題である。本研究では、その試みのひとつとして、日本語をそれ自体が包含する文化的精神活動の発現様式のひとつとして捉え、日本語文法は基本的にそのような精神活動により実現される対話のありようによって規定されるべきであると考え。つまり、SFL 理論の実践として、日本語文法をその使用域の中で記述するのである。このようにして構築される日本語文法を、本論では日本語の「固有文法 (proper grammar)」と呼ぶこととし、英語文法からの転用によって比較される文法と区別して扱う。

後で明らかにするように、この一見あたりまえのようにも見える固有文法の記述は、SFL の個別言語研究において、ほぼ手つかずのまま今に至っているのが現状である。固有文法を記述することの最終的な目標は、これを他の言語——特に英語——の文法と安全に（つまり固有性を犠牲にすることなく両者の相違を明らかにして）比較可能とする包括的モデルを構築することである。ふつうこれは、特定のいかなる言語にも依拠しない純然たる一般理論と、個別的な言語現象の記述とを明確に分離することによって可能とされる<sup>3</sup>。しかし、SFL で展開される一般理論を用いて日本語の固有文法を記述するための方法論は、いまだ確立されないままの状態にある。

しかしながら、SFL 理論を用いて日本語を記述しようとする試みは、少なくとも 1993 年に日本機能言語学会 (JASFL) が発足して以降、約 4 半世紀にわたり多くの研究者によって精力的になされてきた。この流れから生み出された成果は、おもに同学会が発行する *Proceedings of JASFL* およびジャーナル『機能言語学研究』に見ることができる。しかし、これらの論文集に掲載された研究を一覧すると、その多くは、基本的に Halliday の *An Introduction to Functional Grammar* で展開されている英語の語彙文法に関する記述からの「転用比較 (transfer comparison)」によってなされていることがわかる (Halliday *et al.* 1964:120; Halliday and Stevens 1966: 39)。

しかし、次節において詳しく見るように、この「転用比較」という手法は、事実上英語の記述で使用される範疇をひとつの規範とし、別言語との類似性の範囲を把握するための方法論である。したがって、それに適合しない現象がある場合、その部分が一種の個別性

として扱われる。なるほど、この手法を用いて多くの言語を類型化すれば、英語を機軸としてプロファイリングされたシステムに照らしてあらゆる言語を見渡し、その尺度によって認められる「親近性」を明示することはできるかもしれない。しかし、この手法の決定的な問題は、そのような比較によって「便宜上見ることのできる親近性」を見ても、そこから言語および言語使用に関する一般化をおこなうことはできないということである。

本論文のもうひとつの目的は、テキスト分析から読み解かれる（あるいは伝達される）内容のうち、意味のありかとその適用範囲がどこまで及ぶかを、「連動循環モデル」と呼ぶ包括的なモデルを用いて明らかにすることである。とりわけテキスト分析でありがちなことは、テキストのある断片から解釈される内容を、その性質の如何を問わず即座に「意味」として理解し、それをそのまま機能的標号としてテキストの断片に付与するといった分析法である。しかし、解釈は言語の使用に係るあらゆる段階において、その過程をメタ言語的に表現して得られるものである。意味は、同じ系をなす素性との排他的な関係によって同定されるものである。SFL では、これを一般的に選択体系網によって定式化するのであるが、どのような素性をどの体系に含めるかは、その素性に付帯される具現規則の適用によって形式に反映されることで決まるのである。

## 2 選択体系機能言語学を用いた連動循環モデル

### 2.1 理論と記述

20 世紀後半から半世紀以上にわたり言語研究に多大な影響力を及ぼしてきた形式主義アプローチは、言語研究を（生物学や物理学と同じ）自然科学の 1 領域として位置づけようとした。これを唱導する言語学者によれば、すべての言語（の文法性）は生得的器官に内蔵された UG と呼ばれる諸原理によって説明されるという。彼らが追究する言語能力およびその内実たる自律的システムの基本原理は、遺伝的要因によって決定づけられており、それはいかなる言語からも遡求されうるという考え方である。したがって、そのようなアプローチでは、必然的に任意の個別言語研究自体が理論研究としての性格を強くおびることになる。しかし、個々の言語現象の文法性が経験データによって「証明」されない仮説は、そのたびに修正または破棄され、それにともなって個々の文法記述も抜本的な変更を迫られることを繰り返してきたようである。

それに対し、時をほぼ同じくして Halliday が中心となり発展をとげてきた SFL は、理論と記述を明確に分けるというアプローチを堅持することをその基本姿勢としてきた<sup>4</sup>。言語研究に対するこのような姿勢は、上述の Chomsky をはじめ、20 世紀言語学の大きな潮流をなす他の勢力から見れば、思いきったパラダイム転換を迫る革新的なアプローチであった<sup>5</sup>。

Halliday が 1950 年代に研究を始めた当初から、SFL においては、理論と記述が相互に参照しあう関係にありながら、両者の間に設けられる分界を明確にすることにより、言語および言語使用に関する一般理論は、基本的に英語はもとより何か特定の言語を中心にすえて構築されるものではないという (Caffarel *et al.*: 2004: 7)。SFL において一般理論がなう部分は、言語（体系）をより一般的な記号体系のひとつとして組み込むために必要とされる見方を提示することである。一方で、日本語や英語など個々の言語を記述するために必要な範疇、構造、単位などの諸概念は、原則としてそれぞれの記述の中で独自に規定されなければならない。

つまり、どれだけ多くの言語をいかに包括的かつ詳細に記述しようとも、理論はつねに対岸にある水先案内のごとく、記述とともにある存在と解釈することができる。Halliday (1993)は、この理論的側面を提示した代表的な例であり、記述的側面では、たとえば英語テキストの節構造の分析に主眼をおいた *An Introduction to Functional Grammar*(= *IFG*。1985年に初版が刊行されて以降、1994、2004 および 2014 年の 3 度にわたり改訂がなされており、うち、第 3、4 版は Christian Matthiessen が著述に加わっている) と、*IFG* の機能的構造分析の語彙・文法的資源となる選択体系網を扱う Matthiessen (1995) の *Lexicogrammatical Cartography: English Systems* がある。この 2 著は、Halliday と Matthiessen が使用する多層モデルの語彙文法層を「潜在力 (potential)」と「実体 (instance)」という 2 つの側面からそれぞれ記述した英語文法の記述である。

しかし、驚くべきことに、英語以外の言語に目を向けてみると、これまでの研究で示されてきた多くの記述は、事実上 *IFG* で実践された英語の分析がモデルとなっている。たとえば、フランス語 (Caffarel (2006)) スペイン語 (Lavid *et al.* (2012))、中国語 (Li (2007)) および日本語 (Teruya (2007)) などにおいて示される詳細な分析はそれぞれ単行本として刊行されているし、Caffarel *et al.* (2004) ではフランス語、ドイツ語、日本語、タガログ語、中国語、ベトナム語、テルグ語、オーストラリアの現地語であるピチャンチャチャーラ語の文法が、それぞれ基本的に同じ (英語の) 範疇によって「プロファイリング」されている。

上にあげた記述研究は、いずれもが基本的に「転用比較」と呼ばれる手法によって生み出されたものである。しかし、このような比較法は、実のところ一般的な言語の比較・対照研究から見ればむしろ異質とも言える「特別な手法」である (Halliday *et al.* 1964: 120)。

*IFG* において英語の節構造を分析するために用いた範疇を「転用比較」によって日本語の「節」分析に応用した研究は数多くなされてきたが、次のような未解決の問題は依然として残されたままである：

- イ. メタ機能によって分類する意味を形式レベルで統合するための基本的な構造単位はどのように画定されるか。
- ロ. 日本語の書記法では明示されない語、群などの境界はどのような基準によって引かれるか。
- ハ. いわゆる述部に係属的に接合する形式 (いわゆる助動詞や終助詞など) は、どの「ランク」にあるどの「類 (クラス)」の単位を構成する要素となるか。
- 二. いわゆる形容詞文、名詞文などにおいて、過程中核部として機能する要素は何であり、どのような過程型を具現するか。
- ホ. 英語において「叙法構造」の主軸的な 2 要素として機能する「主語 (Subject)」および「定性 (Finite)」に照らし、日本語の「発話機能」の解釈と関係する部分を「叙法構造」とし、そこに含まれる要素を「主語」と「定性」の等価的要素として認めることは可能か。
- ヘ. 助詞「は」によって標示される要素は、「メッセージの出発点」というステータスを得ることで主題性を具現する英語と比べ、どのような特異性があるか。

結局のところ、この「転用比較」によって明らかにされることは、基本となる英語に対し、同じ範疇を用いて別の言語を分析したときに、どれだけ類似性が認められるかという点である (Halliday and Strevens 1966: 39)。これは、膨大な労力を要する「一般的な言語の比較・対照研究」はさておき、「諸言語の文法をメタ機能とランクにしたがって整理し、

それらの相関性を機能的な用語で図式化する」ことにおいて有用とされる (Caffarel *et al.* 2004: 15)。しかし、Caffarel *et al.* も認めるように、「転用比較」にもとづき構築される文法は、その言語の本来の固有性を的確に記述したものではなく、これを言語類型の一般化へと発展させる根拠として用いるべきではない (同上)。

これに対し、SFL の理論が本来どのような使われ方を企図してデザインされているかは、次の Halliday の言説に端的に示されている (Halliday 1985b: 10-11) :

[F]or most purposes for which linguistic theory is used it is the DIFFERENCES among languages that need to be understood——while in those applications where only one language is concerned, the universality or otherwise of its categories is irrelevant. [...] Systemic theory is designed not so much to prove things as to do things.

(言語理論がもっぱらどのような目的で使われるかという点からすると、理解しなければならないのは言語同士の間に見られる相違である——もっとも、単一の言語のみに係る理論の応用においては、そこに登場する範疇が普遍的であるとかそうでないといった問題は論点にもならないのだが。(中略) 選択体系理論は、ことを証すというよりむしろことをなすようにデザインされている。)

本研究が第 1 に目指す文法記述とは、「転用比較」によって類似性から外れる部分をさして「個別性」と呼ぶような文法体系ではなく、本来的に Halliday が企図した SFL 理論の使われ方によって個々の言語の「固有文法 (‘proper’ grammars)」を記述することである。この点に関し、Halliday は先の引用に続けて次のようにも述べている (Halliday 1985b: 11) :

To be an effective tool for these purposes, a theory of language may have to share these properties with language itself: to be non-rigid, so that it can be stretched and squeezed into various shapes as required, and to be non-parsimonious, so that it has more power at its disposal than is actually needed in any one context.

(こういった目的にかなう効果的な道具であるために、言語理論も言語そのものとおなじ性格を持ちあわせていなければならないかもしれない: 柔軟であることによって、そのありようは求められるように伸縮自在となり、また広量であることによって、何かの文脈で実際に求められる以上の力を裁量により発揮するといったように。)

このような記述を実現するための基盤となる文法モデルは、言うまでもなく Halliday の IFG で使用される範疇や構造式ではない。どのような言語であれ、その運用に関わるすべての過程を包含する一般的なコミュニケーション・モデルが必要なのであり、運用過程の各段階に含まれる具体的な概念とその適用法をその使用者自身が記述することによって、言語使用——つまりテキストの産出と理解によって実現される社会的伝達行為——の「なぜ」が説明され、かつ「どのように」実践されるかが予測できるのである。このことはとりもなおさず、言語学者がおこなう言語記述という伝達行為もまた、一種のテキストにはほかならないということである。

したがって、固有文法の記述は、コミュニケーションの包括的な一般モデルに充当される当該言語の運用体系内に言語学者自身が身をおき、その実践をとおして構築していくものである。つまり、英語は英語、日本語は日本語の使用をとおして記述されることが前提であり、その言語の固有性は、その言語自体からなるメタ言語によって画定される範囲を

逸脱しないところに認められるということである。

## 2.2 SFL における文法記述モデルの設計思想

しかしながら、一口に SFL 理論と言っても、どのような設計思想（アーキテクチャ）にもとづき人間のコミュニケーションをモデル化するかによって、その一部として統合される文法記述のありかた（つまりモデル）もさまざまに異なる。現在、最も包括的で強い影響力をもつ英語の SFL 文法モデルは、その設計思想の違いにより 2 つの「バージョン」に大別されると言ってもよいだろう。ひとつは、Halliday や Matthiessen らが開発しているバージョン（ここでは Fawcett に倣い、その元となった開発拠点にちなみシドニー・グラマー（Sydney Grammar=SG）と称する）であり、もうひとつは Fawcett や Tucker らが SG の代替モデルとして提唱しているバージョン（カーディフ・グラマー=Cardiff Grammar（=CG）と呼ばれる）である<sup>6</sup>。この両者が基本的に同じ SFL の一般理論にもとづいて構築されているが、「代替的な（alternative）」関係にある別のモデルとされる根拠は、言語一般の理解に対する基本的なアプローチの仕方に画然たる違いがあるからである。そのなかでも特に重要な部分は、SG が言語の社会・文化的側面に主眼をおいているのに対し、CG は認知・対話的なコミュニケーション・モデルのなかに言語の領域を統合しようとしている点にある（Fawcett 2000）。

言うまでもなく、SG であれ CG であれ、研究の内容や目的によって既存のモデルのなかから適したものを選ぶことは、十分に可能である。実際に、前節で言及した「転用比較」により示されるいくつかの言語の文法記述は、SG の枠組みでなされている。これらの文法も、それによって可能なタイプの比較研究を目的とする場合には、便宜上とりうるひとつの有効なアプローチとなるだろう。したがって、本研究の試みである「固有文法」の記述を実践するために、SG をモデルとすることも一応は可能であるかもしれない。しかし、これらは SG モデルそのものの設計思想において、「本来的な言語記述はどうあるべきか」という問題に対し、Halliday 自身が仮定した解決法をそのまま反映させているわけではない。

SFL を特徴づけるひとつの側面に、テキストを言語使用に係る行為自体から切り離された「所産 product」としてではなく、社会的営みのなかで意味するという精神活動の「実体 instance」として扱い、言語現象を分析するための重要な分析単位としている点がある。この事実は、文法モデルの基本的なデザインを決定づける不可欠な要因となる。すなわち、一定の単位の中で構造を有し、音声または文字からなる語の配列によって顕現される言語形式（つまりテキスト）は、意味の仕方を反映し、経験世界および他者（正確には発話者自身を含み、受け手となりうるあらゆる参与者）との係わり合いのなかで、伝達しようとする意味を具現するための手段であると考えられる。意味をどのように扱うかという問題が SFL 一般における文法研究のなかで重要な部分をなすことは間違いないが、ここでしようとしているのは、文法を一面的な意味現象として扱うのではなく、意味することと形にすることをいわば表裏一体の関係として統合的に記述するということである。

「意味する」とことと「形にする」とことは、互いに無関係に記述できる自律的な領域ではない。しかし、この 2 領域は、それぞれ「素性の選択」と「要素の配列」というまったく異なる手続きによって作用するため、レベルの明確な区別を設けることが必要である。そもそも言語の機能主義理論という見方は、一般的に意味を根幹にすえて文法をモデル化する指向性強いが、それは単に意味概念を用いて形式を分析し、記述することに終始する

ことではないはずである。なぜなら、そのようなことをしてしまうと、後述するように、機能文法を解釈文法と同義的に見るというあやまった認識に陥ってしまうからである。

したがって、言語記述において、テキストの文法性を問題にするということは、意味の選択と要素の配列という2つのレベルでなされる操作を、具現規則によって必然的な関係にあることを明確に示すということである。たとえば経験から認識される概念が叙述性をもったひとつの命題である場合、その命題の内容に関する部分は多様なタイプの「過程 (process)」として択一的な関係によって分類される。SFLでは、これは選択体系網として表される部分である。この選択体系網から選択される意味は、かならず当該言語の語彙・文法に表しうる仕方で「形になる」ことが必要である。意味記述の妥当性は、したがって、まさに意味レベルにおいて、ある素性が別の素性と排他的な関係によって選択体系をなすかという基準により検証される必要がある。しかしそれに加え、一方で文化的な共有認識によって理解可能であること——つまり上位レベルからの (from above) 基準——と、もう一方で、認めうる「意味」として体系をなす素性には、必要な具現規則が付帯され、それらを適用することにより構造をなす整った形式、すなわちテキストが生成されること——つまり下位レベルからの (from below) 基準——からも説明されなければならない。

意味と形式のレベルを明確に区別し、言語使用の手続きを明示的かつ一般的な形でモデル化したのはCGである。次節において提示する「連動循環モデル」も、言語固有性（ここでは特に日本語の記述を念頭においているが、後述するように、個別文法の「転用比較」に代わる新たな比較法を策定するための枠組み）を可能にする一連のプロセスを記述するための記述モデルとして設計されているが、特に文法を扱う部分については、上述の理由により基本的にCGモデルを使用している。

## 2.3 連動循環モデル

FawcettをはじめCGの開発に参画する言語学者らは、SFLを基盤とする包括的な認知・対話モデルを1970年代前半から整備してきた。実際、これにもとづいて記述される英語文法は、現存するなかで最大規模のコンピュータ・プログラム（「COMMUNALプロジェクト」と呼ばれる）にも実装され、その実動性は多くの研究者によりつぶさに検証されている<sup>7</sup>。Fawcett (2002)によれば、このプロジェクトで開発されている大規模なテキスト生成型の文法は、人間に共通の認知能力を基盤としており、あらゆる言語による対話をモデル化するために使用されうるとしている：

[T]his already very large generative lexicogrammar has the potential to be [...] the largest fully integrated, operational model of any language in the world.

（このすでに大規模化されている生成型の語彙・文法は、最大規模の完全な統合型実用モデルとして世界のいかなる言語にも適用される可能性を秘めている。）

本研究で提案する「連動循環モデル (cyclical cog-wheel model)」は、基本的にこのCGが掲げる認知・対話的モデルの設計思想を受け継いでおり、この点において、CGのいわば「スピン・オフ」と見ることもできるだろう。しかし、「固有文法」を記述するためにここで前提としている基本的な考えは、日本語のはたらきはそれ自体をはたらかせることによってしか示せないということである。このような考えに立つ文法モデルは、2.1節で述べた言語運用の「なぜ」と「どのように」という問いへの回答を積み重ねる過程で、一義的にその固有性自体によって構築すべきである。したがって、本研究がとるアプローチは、



テキスト分析をとおして言語使用に関わる一連のプロセスを内側から眺めることを基本姿勢とし、日本語の「固有文法」の記述とそのモデル化の必要性をあえて強調することから始める必要がある。さらに、将来的な展望としては、「固有文法」を他の言語から隔絶した存在とするのではなく、「転用比較」に代わる別の比較法を模索し、CGの認知・対話型一般モデルに統合させようと企図している。

このような趣旨によって連動循環モデルの展開を試みた最初の研究はFunamoto (2014)である。この拙論では、ここで日本語の「固有文法」と呼ぶ記述を可能にするために、文化と精神構造とを文法体系とどのように関連づけければ、日本語に固有の「名詞性 (nominality)」を自律的に説明することができるかを考察した。このような見方に立って我々のコミュニケーションを見てみると、人間は創造力と創造物という2面性を併せもつ「状況」の中に身をおいて他者と関わりあい、社会の成員として活動しているという考えを前提としている。我々は、他者と共通の社会的基盤のうえにたつて一定の共有知をもつことによりコミュニケーションをおこなうが、それが可能となるのは、連綿とつづく状況下において避けようのない文化的圧力が我々の認識のはたらきに作用するからである。つまり、言語が文化的な固有性を表出する記号であると仮定すると、その種の固有性は、経験の認識を言語化させる以前の、概念レベルにおいてすでに発現しているということになる。言語や他の複雑な記号体系は、そういった状況のなかで、まず実効性のある意味の潜在力として認識を調和させ、その潜在力の発動（つまり意味の選択）が言語（ないし他の記号）の使用という形となって次の新たな状況を生み出すという循環に入り込むのである。

このように、我々は言うまでもなくつねに特定の状況に身をおいてコミュニケーションをおこなっている。しかし、この状況にある種の実在的単位として言語の科学的研究の射程に入れるということは、単に周辺の物や事象、あるいはそれらの関係性などを、人間と対置された外的世界として客体化するのではないということである。なぜなら、状況は、一方でそれ自体に文化的な圧力が内在しており、その中に身をおく我々の意識とそのはたらきによる概念形成に絶対的な影響をおよぼし、他方において、そうした文化的指向性に根差した意識のフィルターをとおして我々に見られることによつてのみ認識される世界でもあるからである。つまり、状況は文化的に既定された意識のはたらきによつてその見え方も変容しうる心的実在である。したがって、このような意味での「状況」とは、社会的営みのなかで活動する自己をその一部として規定し、偏在する一定の価値観ないし「ものの見方」によつて他者と知識を共有するための基盤となる社会＝認知的単位と捉えるべきである。

しかし、ここで述べた「認識」は、仮に視覚や聴覚などの外的な刺激によつて発動されたとしても、それは継続的・累積的な生活経験から構築されていく「信念体系」を絶えず参照しながら概念形成に作用する。この信念体系とは、具体的には短期的、長期的な記憶をもとに形成されていく「知識」の集積である。この知識体系は、大別すれば(i)経験にもとづく「知」、(ii)情動・欲求などより主観性に根差した「情」および(iii)理性が司る「理」の3領域に分けられると思われるが、ここには環境由来の価値基準から所与の経験事象にどう関知するか、個および集団が他者に対して自己をいかに確立するか、などさまざまな要素が含まれる。人間の発達過程において、日常生活を通して経験する諸活動から学習されることは、この知識からなるパイロット・スキームとなり、新しい諸活動の資源として再利用される。

Funamoto (2014: 65)で示したモデルには、この知識を扱う領域が欠落していた。これに修正を加え、知識体系を盛り込んだバージョンが、図1である。

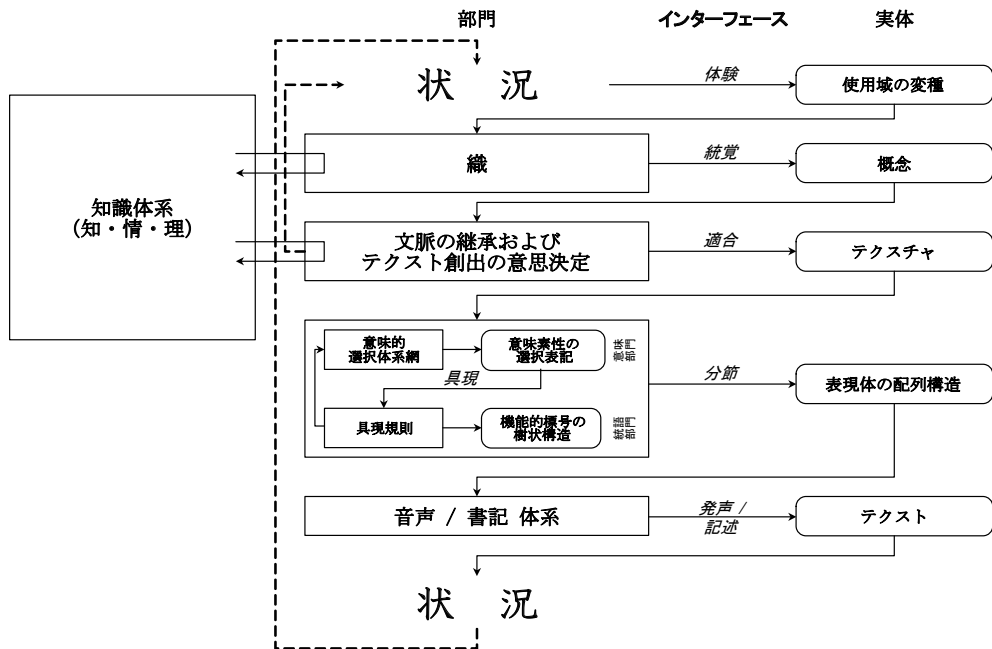


図 1 修正・拡大版連動循環モデル

この段階で、このモデルのなかで意味部門が占める位置と役割、および他の部門との連動性を明らかにするためにも、図 1 を参照しながらもう少し詳しく見ておく必要があるだろう<sup>8</sup>。

イ. 状況および文脈の認識：

8つの「織」から創発される概念形成＝認識<sup>9</sup>。文化によって世界の見え方が決まるのはこの最も高次の段階におかれる。

ロ. 「知」・「情」・「理」の参照：

すでに定着している知識・信念と、現在の流動的な状況の中で経験したことから得る情報・感情（特に欲求）。言語的・非言語的の両方があり、その状況下において常に参照される；つまり意識にあがる概念が知識に照らして顕在化され、**他者および状況とのかかわりのうちに自己を編入する**（そこに自己をどのように位置づけるか、自己が状況とどうかかわるか。e.g.当事者 vs.傍観者など。自分にとってそれがどのような意味をもつか）。

ハ. 言語・非言語コミュニケーションの動機づけ：

コミュニケーションによる問題解決とゴールまでの方策を立てる部門である。

ニ. 文脈の継承および創出：

適切な言語使用のレトリックと何をどう言うかに関する判断がおこなわれる。

ホ. 表現の意味選択：

意味の**選択**。

ヘ. 形式的具現化：

**語彙・文法構造**の生成。

ト．表出

発音、文字化によるテキストの実体化。

言語使用を図 1 の全体的なモデルに照らして見れば、テキストはいわば「重層的な解釈」によって運用されていることがわかる。次節では、そこから言語的な「意味」の記述に含まれる領域を決定する方法について詳しく見ていく。

### 3 意味の記述的妥当性

#### 3.1 意味のありか

次のテキスト 1 は、松本清張の『点と線』から抜粋した一節である。

テキスト 1

三原は、昨日の応接間にまた通された。いま電話で話しているから、少しお待ちくださいと茶を運んだ女の子が言ったが、その言葉のとおり、安田辰郎は容易に姿を現わさなかった。三原は、ぼんやり壁にかかっている静物の油絵を眺めていた。商用の電話というものは、ずいぶん長くかかるものだと思っていると、

「やあ、お待たせしました」

と安田辰郎が、にこにこしながらはいってきた。昨日と同じに、三原は彼の態度に気圧されるのを感じた。

「おいそがしいところを、たびたび邪魔します」

三原は腰を浮かせた。

「いや、いや、(1) どうも。あいにくと電話をかけていたものですから、お待たせしました」

安田は目もとに微笑を見せて、悠然と言った。

「ご繁忙で結構です」

「(2) どうも。しかし、今の長い電話は商売じゃないんですよ。鎌倉の家と話していたんです」

(下線部および下付きの番号は筆者による)

この一節のなかで取り上げるのは、下線部(1)と(2)である。「どうも」という表現は、日常的な会話においても頻繁に使われることばである。これは一般的に「ありがとう」、「すみません」などの謝意を表す表現をはじめ、対人的な意思表示に関する言辞が後続しやすく、両者には一定の共起関係が見られる。たとえばテキスト 1 の下線部(2)であれば、「どうも (ありがとう)」のように、後段に感謝を表す内容がつづくと予測される<sup>10</sup>。転じて、この「どうも」自体が文脈に応じて感謝、謝罪、悔やみなどの含みをもつ、というのが辞書的な定義である。しかし、下線部(1)は後段からその意味するところを明確に補って解釈できるというよりも、それ単独でよりあいまいな「含み」をもつ慣用表現として用いられていると解することができる。では、(1)が生じる文脈において、これを好適な表現として使用するためには、どのような判断がなされたと考えればよいのだろうか。話し手の視点から、この判断をめぐる発想の過程をできるだけ日常言語で表してみると、おおよそ次のように言うことができる：

- (3) わたしはいまあなたに挨拶を返すのだが、ふだんのあなたとの間柄を念頭に、また現下の状況からしても、あまり堅苦しい挨拶をかわす場面ではない。しかし、いま踏まえておくべき事実は、電話をしている最中に訪ねてこられたとはいえ、結果的にわたしはあなたを待たせたということだ。それにもかかわらずあなたは腰を浮かせて「おいそがしいところを、たびたびお邪魔します」などとそれなりに懇懃な挨拶も忘れなかった。したがって、わたしとしてもそれに見合うぐらいには恐縮の念らしき気持ちも表しておきたい。しかし「こんにちは」や「いらっしやい」のようなありきたりの常套句を使っても、そのような意味合いまでは込められないし、そのような意図は伝わらないだろう。とはいえ、「すまない」とか「恐れ入ります」のように、何かこちらの態度を明確に示さなければならないほど大げさな事でもないのだ。まして、あなたを目のまえにして手紙をしたためるのでもあるまいし、過剰なまでに儀礼的な挨拶というのはやはりおかしい。この場合は、失礼にならない程度に口頭で簡単に——つまり手短かにひと言で——済ませるのがちょうどいいように思う。そこで、「どうも」とするのである。この表現にしても相当慣用化されているが、その意味合いの受け止め方については相手にゆだねる部分を多くのこしながら、その伝えんとする意思は強いものであることも表明することができる。なるほど、口語的かつ略儀的な「どうも」は、ともすれば軽率で丁重さに欠ける印象を与えかねない。しかし、それは同時に、形式にこだわらないスタイルが好まれる文脈で、しかもここでの受け答えが会話の重要な部分でもない状況下では、この表現が必要十分な効果をもつのだ。

(3)は、「どうも」という特定の表現をもちいるために、送り手はどのような筋道を経て思考をめぐらせるかを随意的に粗描している。さらに、「送り手はどういうつもりでこの表現をもちいたか」という受け手の観点から見ても、結果的におおむね同じような推論が得られるかもしれない。もっとも、(3)に「どうも」を理解するために必要な要素が十分に盛り込まれているかどうかは、これが他の表現が生じる可能性を排除するだけの領域までカバーできているかを明確に示さないかぎり判断できないのだが、ここでは妥当であると仮定する。そうしたうえで、(3)があくまで意味をどう扱うかという本節の論点をあぶり出すための便法にすぎないという事実は、ここで明確に述べておかなければならない。つまり、このような叙述は「どうも」というテキストの断片から「読み取られる情報」を簡便に列挙しているだけであり、その意図は、(3)のうち厳密に「意味」記述の射程に入れるべき要素は何であり、それはSFLの枠組みでどのように記述すればよいかという理論的な問題を提起することである。したがって、仮に(3)が多くの母語話者にとりおおむね首肯できる内容であったとしても、それ自体によってこの言語現象の何かが説明されるわけではない。そもそも、実際の発話において送り手が「どうも」という表現をもちいるために、文字どおり(3)のような考えを意識的に省察するとはあまり考えられないだろう。これは、母語話者がテキストの文法性を無意識のうちにも判断できることと似ている。また、このことは、上述のとおり、受け手がテキストを理解する場合も同様である。しかし、コミュニケーションのなかでテキストが生みだされ、かつ消費される過程全体を見渡してみると、送り手と受け手のいずれの立場から見ても、ここでの観察から示唆されることは、(i) 状況および文脈の認識、(ii) それらが参与者におよぼす心理的作用、(iii) 知識および信念との照らし合わせと推し量り、(iv) 言語使用の意図と判断、(v) 言語によって表現される意味の選択と(vi) その形式的具現化、および(vii) その表出(つまり音声・書記)といった

あらゆる段階において、テキストの使用と直接関係のある部分を記述するだけでも膨大な量にのぼる情報が何らかの仕方によって処理される、ということである。結局のところ、(3)が提示しているのは、その一連のありようをごくインフォーマルな形で言い表してみただけのものだと言える。

本節の焦点、すなわち一般的に SFL 理論が念頭におく言語研究の射程のうち、意味として記述すべき範囲はどうあるべきか、さらに、連動循環モデル全体のなかで意味はどのような位置を占めるかという問いに照らしてみると、(3)は特定の文脈で生じる「どうも」について、複層的に見ることで得られる解釈を混成的に描述していることに留意すべきである。言いかえれば、この言語表現について、テキスト上の文脈、発話時の周辺の状況（場面）、参与者間の対人関係ないし心理状態、前提および意図など、考えうる要因を総合してテキストがどのように理解されるかを、先に述べた 7 つの段階に照らして描写したものが(3)である。ごく一般的な感覚からすれば、このような意味で「解釈」ないし「理解」される事がらというのは、「意味」とほぼ同義に考えても差しつかえないだろう。あるいは、それら一つひとつの段階がまとまりのある全体として作用し、現にコミュニケーションが正常におこなわれていることを指して、「意味する」とか「有意義な」ことばの使用がなされるなどと一般的には言われる、と述べたほうがより正確かもしれない。しかしいずれにせよ、ここで言う「解釈」や「理解」に含まれる要素は、このテキストに直接参与する当事者（ここでは作中の「安田辰郎」）から見て、少なくとも（i）「どうも」から直接読みとられる内容（意味）、（ii）そこから波及する言語的および非言語的な効果、および（iii）一定の受け止め方が可能となる前提を、観察ないし分析しようとする第 3 者（つまりここでは読者＝本論文の筆者）が日常的な言語に織り交ぜて描写したものである。つまり、テキストがひとつのまとまった伝達単位として展開する中で、言語表現として具現される「どうも」の意味は、つねに全体に照らして理解されるあらゆる情報のごく一部である。

すでに見たように、テキスト 1 にある「どうも」という表現が（他のいかなる部分もそうであるが）テキストの首尾一貫性を阻害することなく、一定の機能を担って全体の一部として有効に使用されていると理解されるには、上で挙げた 7 つの部門が全体として連動的に作用する必要がある。

## 3.2 意味の定式化

意味レベルで扱われる構成要素の具体的な姿とはどのようなものか。言語研究においてそれはどのように明示され、その妥当性を判断する基準はどこに求められるか。以下で、これらの問いについて考察する。

実際に使用されたテキストを分析する立場から見れば、線状的に配列されたテキストから幾重にも織り込まれた構造をひもとき、それによって伝達される「意味」を指定することは、それほど困難な作業ではないかもしれない。なぜなら、すくなくとも母語話者にすれば、それは（どういう形で示すかは別として）一見してわかることだからである。しかし、この場合に捉えた「意味」とは、結局のところ、「実体化された意味」の目録でしかない。この事実は、意味を研究するうえで重要な意味をもつ。

コーパスを言語学に応用する技術および方法論は、近年目覚ましい発展をとげ、言語研究にも積極的に活用されている。たとえば、膨大なデータをもとに、語彙の共起関係やそれが生じる確率、あるいはジャンルないし伝達様式等の差異によって生じる語彙・文法の偏向性など、いわゆる「文＝文法」ではなかなか扱いきれなかった領域まで裾野を広げるこ

とを容易にし、その有用性は技術的な発展とともに今後さらに高まるものと思われる。さらに意味分析においても、コーパスの導入によりそのカバーする範囲は格段に広がり、詳細な分析が可能となるだろう<sup>11</sup>。しかし、コーパスによる統計的处理や事例にもとづくテキスト分析から提示される「意味」は、基本的に「実体化された伝達上の意味」のいわば目録である。

まぎれもなく、「実体化された伝達上の意味」は意味レベルにおいて適切に扱われるべき事項である<sup>12</sup>。たとえば、語彙・文法項目の出現頻度、共起関係、語彙的凝集性、イディオム、比喻、テキストの修辞構造などのあらゆる現象は、具体的にどのような意味伝達の手段として用いられるかを詳細なテキスト分析によって明らかにするうえで重要な要素である。言い換えれば、文法性を含む広い意味でのテキスト性——つまりテキストはいかにしてそのようにあるか——を意味の選択確率とジャンル構造のパターンという観点から説明するうえで、事例にもとづくテキスト分析が果たす役割はきわめて大きい。しかし、意味研究の至要たる目的は、特定の状況のなかで人間の意識が能動的に作用し、それと「意味する能力」の形成および遂行がどのように関係づけられるかを明らかにすることである。つまり、意味論の本体をなす部分とは、Halliday の言う「意味の潜在力 (meaning potential)」を記述することである。

SFLにおいて、上述の「能動的な意識の作用」とは、具体的には「意味の選択 (choice between meanings)」によって実現される意識のはたらきである。このような見方によれば、意味は、選択肢として分節化される素性間の排他的関係性によって特定される。SFLが意味記述において用いる「体系 (system)」は、この意味素性間の関係を定式化して顯示するための仕組みである。個々の体系は、別の体系で選択される素性との依存関係によって結びつき、その経路を巡行することで細密な選択体系のネットワーク、つまり選択体系網 (system network) が形成される<sup>13</sup>。

ところで、Funamoto (2014)でも指摘したように、意味そのものが排他的な関係のうちにあるとする見方は、必ずしも Halliday や西洋的な思想背景に由来するわけではない。東洋の言語哲学においても、たとえばアポーハと呼ばれる理論のなかで基本的に同様の見方が展開されている<sup>14</sup>。また、井筒 (1983/91: 410-411) は、東洋において多元的に発展してきた思想・哲学を、包括的なパラダイムとなるような「東洋哲学」の体系へと再構築する試みとしており、その著述のなかで本研究にとっても洞察に富む見方を提示している：

東洋において我々が第一次的に見出す哲学は、具体的には、複雑に錯綜しつつ併存する複数の哲学伝統である。

(中略) このような状態にある多くの思想潮流を、「東洋哲学」の名に価する有機的統一体にまで纏め上げ、さらにそれを、世界の現在の状況の中で、過去志向的でなく未来志向的に、哲学的思惟の創造の原点となり得るような形に展開させるためには、そこに何らかの、西洋哲学の場合には必要のない、人為的、理論的操作を加えることが必要になってくる。

そのような理論的、知的操作の、少なくとも一つの可能な形態として、私は共時的構造化ということを考えてみた。(中略) つまり、東洋哲学の諸伝統を、時間軸からはずし、それらを範型論的(パラディグマティック)に組み変えることによって、それらすべてを構造的に包みこむ一つの思想連関の空間を、人為的に創り出そうとするのだ。

こうして出来上がる思想空間は、当然、多極的重層的構造をもつだろう。そして、この多極的重層的構造体を逆に分析することによって、我々はその内部から、幾つかの基本的思想パターンを取り出してくることができるだろう。それは、東洋人の哲学的思惟

を深層的に規制する根源的なパターンであるはずだ。

井筒の主張する「多極的重層的構造をもつ思想連関空間」は、哲学的領域における考究であるが、これが目指そうとしているのは、東洋思想が文化固有の要因と密接に結びつきながら独自に発達させた体系を機軸とし、複雑に関連しあう人間知の体系を再構築するという壮大な企てであると言えよう。この井筒の陳述は、本研究が固有文法の記述モデルを構築するにあたり目指す方向性を照らす役割をになうように思われる。

しかし興味深いのは、本研究が SFL の、とりわけ CG の「認知・対話的」コミュニケーションの考え方をモデルとして出発しているとはいえ、日本語の固有文法のために図 1 で提示する記述モデルが、結果的に CG の包括的対話精神モデル (the integrative model of communicating mind) の構図に近づきつつあるのと同時に、井筒が追究を試みる東洋思想の「多極的重層的構造をもつ思想連関空間」とも基本的に同じ方向を向いているということである。両者に共通している点は、要するに言語および言語使用が精神活動に統合される領域をなし、意味を意識の活動から創発される連動的なプロセス全体のなかで排他的選択という段階として包括的なモデルに組み込もうとしている点にある。したがって、意味は、(イ) それ自体のレベルにおいて体系をなし選択されること、(ロ) 上位レベルから見て選択が動機づけられること、そして (ハ) 下位レベルから見て選択された素性は語彙・文法的手段によって具現されること、という 3 つの要因から記述されなければならない。

しかし、当然ながら意味は言語だけにその発現の素地が見出されるものではない。絵画、音楽、ダンス、彫刻、建築など、記号的性格をおびる諸活動およびその所産においては、それぞれの意味論があってしかるべきである。ここで我々が意味として論じる領域は、厳密には「言語意味論」を指している<sup>15</sup>。その意味で、意味記述の妥当性を検証するうえで、決定的に重要となるのは、言語レベルでの連動性が明確に示されるかどうかという点である。つまり、Fawcett (1988: 9) の言を借りれば、「具現規則なくして選択体系網なし」の原則を堅持することが、言語意味論の科学研究において意味記述の論拠となる。

ただし、注意しなければならないことは、Halliday (1976b) において実演されている分析が示唆するように、英語のテキストとして生じる節をひとつ取りあげ、そこに描出される経験的意味を見るだけでも、その意味分析は一様に固定化されるものではないということである。つまり、意味および形式レベルで扱われる範疇、単位、構造の記述というものは、ゆらぎのなかにある多面的な解釈によって多様に変化する可能性があるということである。たとえば、Halliday (1976b) は、*the teacher taught the student English* という 1 つの単純な節をめぐり、これが具現する過程構成は、見方によって潜在的に少なくとも 5 つの異なるパターンに分けて分析することが可能であるという (表 1)。

意味	具現	敷衍的解釈
material process: action / (non-middle: active) / benefactive	Actor ^ Process ^ Beneficiary ^ Goal	the teacher imparted English to the student
material process: action / (non-middle: active) / bounded	Actor ^ Process ^ Goal ^ Range	the teacher instructed the student in English
material process: action / (middle: causative) / bounded	Initiator ^ Process ^ Actor ^ Range	the teacher caused the student to learn English
mental process: cognition / (middle: causative) / bounded / perfective	Initiator ^ Process ^ Cognizant ^ Range	the teacher enabled the student to come to know English
verbal process: (middle: causative) / bounded / perfective / potential	Initiator ^ Process ^ Speaker ^ Range	the teacher enabled the student to become a speaker of English

表 1：意味構造のゆらぎ

この分析から示唆されることは、コミュニケーションにおいて受け手がテキストを理解する場合にも、意味の解釈には選択的な操作が必要とされる可能性があるということである。つまり、言語理解の過程は、発話者がテキストを産出するために巡行した（と受け手が考える）選択体系網の経路を忠実に遡上するという単純なものではなく、受け手が認識する状況や知識を参照し、そこから得た推論と所与のテキストとのマッチングによって最短の経路で素性群の選択をおこなうという一連の工程を含んでいると考えるのが自然であろう。Halliday (1976b) が示す節の 5 つの意味解釈は、それぞれ異なるコンテキストで履行される言語理解の過程をまさにその実践によって提示しているとも見ることもできるのではないだろうか。いずれにせよ、この言語理解の側面については、本論の立ち入る領域ではなく、さらなる研究が待たれるところである。

これまでの論点をまとめると、選択体系網によって定式化される（言語の）意味は、次のような重要な特徴をもつ。

- i. 意味素性は、所与の表現形式が表徴する対象の内包や外延を別のことばで言い換えたもの（パラフレーズ）ではない。
- ii. 体系網の巡行過程で得られた素性 1 つひとつに対して特定の形式と 1 対 1 の対応関係をなすわけではない。
- iii. 選択された素性（の集合）は、それぞれに付与された具現規則の適用を経て、ひとつの機能的な構造体に統合される。

### 3.3 連動性の内側と外側

これまでに述べたように、連動循環モデルは、記述を理論から引き離し、個別言語の固有性をその発生系統の内側から眺めるための枠組みを提供する。その場合、「固有文法」の具体的要素をなす範疇、単位、構造は、認識からテキストの表出にいたるまでの連動性の有無が最も重要な基準となる。

では、固有文法を外側から眺めるとどうか。この問いは、密接に関係する 2 つの問題を分けて考える必要がある。ひとつは、他の言語と比べてどうかという問題であり、もうひとつは、言語および言語使用に関する SFL 理論一般との関係において固有文法がその理解にどう貢献するかという問題である。

#### 3.3.1 モデルの内側から見た「固有文法」

本研究がそうであるように、個々の言語は多元的な文化に根差した意識を固有の仕方でも映し出す記号体系であると仮定した場合、機能主義的な見方を規定する理論的概念は別として、少なくとも記述的な概念（たとえば日本語に固有のある意味を具現するために導出される語彙的ないし文法的範疇）を標示するメタ言語は、本来的に日本語から内発的に、あるいは自己規定的に案出されなければならない。そうでなければ、当該言語の固有性を自律的に扱うことなどできないからである。この意味で、SFL 理論をもちいて日本語を記述するには、いったんは連動循環モデル全体を日本語固有の「閉じた系」として運用することが、このような自己矛盾を回避するために有効である。



しかし、このような立場を基本姿勢として、たとえば Quirk *et al.* (1985)や Biber *et al.* (1999)のような、包括的な基本文献となる記述文法の「日本語版」を実際に整備するという企ては、きわめて困難な作業をとまなうことが予測される。事実、日本における SFL 研究において、この分野はほぼ手がつけられないままの状態にあると言ってよいだろう。その主な理由として、Caffarel *et al.* (2004)が指摘するとおり、固有文法を十分に包括的で応用研究に用いる水準まで拡充するとなると、あまりに膨大な時間と労力を費やさなければならないという事実があることはすでに述べたとおりである。しかし、それを理由にこの難題を棚上げにするのは、いずれは着手すべき問題を先送りにすることに他ならず、これを言語学者の本務とする立場からすれば、これはもはや懶惰と言わざるをえない。そもそも、SFL において先導的な役割を果たす英語文法にしても、もとはラテン語文法からの転用によってつくられた文法であった。しかし、Halliday やその他多くの言語学者らが文法範疇の意味化をおしすすめ、結果として着実に英語独自の文法体系へと発展させてきたのである<sup>16</sup>。日本語研究においても、日本語固有の選択体系機能文法の記述に着手すべきであるというのが、本研究の最も重要な提言である。

そうは言っても、固有文法を内側から眺めるとは、具体的にどうすることを言うのであろうか。単純に考えれば、それは事実上日本語を英語の文法記述に用いられる既存の諸概念から完全に遮断し、母語話者の直観を十分に活用して言語使用に関する個々の現象を一から体系化することであろう。たとえば、いわゆる「テンス」や「モダリティ」、あるいは品詞の分類や文法構造の階層的構成原理（いわゆる「ランク・スケール」）なども、少なくともそれ自体を妥当な普遍的概念として無批判に受け入れ、日本語の文法を構成する既定の範疇とすることは、もはやできなくなるかもしれない。そして、そうすることの妥当性が十分に説明されるのであれば、それでかまわないというのが筆者の立場である。

そうして構築された文法が全体像を浮かび上がらせたとき、それが呈する姿とは一体どのようなものか、この段階では想像もつかない。しかし、これをつきつめていけば、井筒が投げかけた難問、「異文化間の対話は可能か」という問題に行きつくことだろう（井筒 1985: 46ff）。つまり、「固有文法」の記述とは、異なる文化を包含する個々の言語を相対的に見るための足場をつくることである。ひとつの言語を内側から眺めるとは、それを孤立無援の記号体系として他の言語と完全に切り離すのではなく、むしろ日本語なら日本語話者の立場から異文化への視界をひらくことに他ならない。

### 3.3.2 比較第3項としての人間固有性

第2.1節で述べたように、言語研究における理論と記述の分離は、SFL が打ち立てた革新的アプローチのひとつである。この革新性なくして、本研究で追究を試みている多元的な言語記述の可能性は、見込みようもなくなるだろう。

しかし、意味や形式、ないし音韻・書記などの各レベルにおいて、個々の言語現象を固有の範疇によって一般化した記述は、あくまでそれ固有の系統の中でおこなわれる一般化である以上、それがそのまま言語一般の理論的仮定として一元化された見方になるわけではないことは十分に留意しておくべきである。

古典的な類型論でなされていた言語レベルの対比ではなく、個々の言語現象をそれぞれの体系ごとに切り分けて対比するという方法をとる場合、どの言語のどの部分を対照させるべきかという基本的な前提から問題にしなければならない。しばしば採られる方法論は、形式、意味、概念など任意のレベルにおいて2言語間に共通する部分を比較第3項とする

比較法であろう。たとえば、英語の *The heavy rain prevented me from getting home by train* のようないわゆる「無生物主語構文」に含まれる過程構成の役割関係から、概念レベルにおいて因果関係にある 2 つの要素を分化させ、それをもとに日本語で「豪雨のために電車で家に帰ることができなかった」という表現に見られる論理構造と一定の等価性を認めるというものである。しかし、これとしても、やはり一方の言語に見られる現象に関する特定の解釈がもととなっていることは明らかである。

そもそも、本論で主張する固有文法をまずは記述し、次にそれらを対比することにどのような意義があるのか。さらに、対比から得られる知見が言語一般の理解にどう寄与するのかを明らかにしなければならない。本稿において、この問題をこれ以上論じる余裕はないが、言語が文化や精神と密接に関連しあいながらそれぞれに固有なシステムを発達させながらも、最終的には人間がコミュニケーションによって分かりあえるのはなぜかという問いが基本にある。この意味で、本研究が最終的に向かうべきゴールは、言語を人間固有の能力に統合することである。固有文法を対比するということは、この人間固有性を追究することであり、またこの人間固有性を比較第 3 項として言語の多様性を説明することである。固有文法を対比した先にあるものがかりにどこかのレベルで共通する部分が見られたとしても、1 言語に固有な系のなかに組み込まれた範疇を用いるかぎり、それらは言語間に見られる固有性の対比をするための比較第 3 項にはなりえない。

## 4 結論

個々の言語をその本来的な固有性に即して記述するためには、どのようなモデルが有効か。SFL において、日本語研究をとりまく状況は、Halliday の *IFG* をモデルとする「転用比較」が支配的であった。しかし、本論文では、英語からの転用比較によって記述された文法には残された課題が多く、言語の固有性を論じるうえで限界があることを示し、これに代わる「固有文法」とそれを可能にするモデルの必要性を論じた。

そこで、この固有文法の構築にあたり、なぜ SFL なのかという基本的な問いに対し、Halliday がなしえた理論と記述の分界が不可欠であることを詳細に述べた。そのうえで SG と CG という 2 つの「代替的」アプローチの基本的な設計思想について触れ、固有文法を統合するコミュニケーション・モデルの構築には、認知・対話型の CG モデルが優位であることを指摘した。

SFL において、文法記述の中心課題は、意味の扱いである。しかし、それは文法をすべて意味レベルに押し上げ、それを自律的な単一の領域とすることではない。この点については、テキストを産出と理解という側面から具体的に分析し、そこから「解釈」される事柄のうち、意味に関係する部分は全体的なプロセスの一段階で得られる限られた領域であることを見た。そこで、すべてのコミュニケーションが前提とする特定の状況から、一方で文化的な圧力によって形成される精神のはたらきと、他方で経験の蓄積によってつねに参照される知識とが原動力となり、目的に即した話者の判断がことばの意味選択に作用しテキストの産出にいたるという一連の過程を連動的な循環とする見方が有用であるとし、連動循環モデルを提示した。

最後に、日本語の固有文法が他の言語のそれとどのような関係にあるか、さらには SFL という枠組みのなかで発展させることの意義とはどのようなものかについての問題を提起した。これからの言語研究において固有文法がになう役割は、異文化間の対話と相互理解の可能性を見出すことであり、今後のさらなる発展が期待される。

## 注

- <sup>1</sup> この研究は、北陸大学特別研究教育助成（コード 350004）を受けて実施されたものであり、本論文は 2013 年度から 2014 年度にかけておこなわれた研究の成果報告である。
- <sup>2</sup> J.J. Webster が「ハリデー論集」の第 11 巻として編集した *Halliday in the 21st Century* の主要なテーマは、言語理論の‘appliedness’である。本書の著述を見れば明らかなように、Halliday は理論を言語研究における多様な目的の実現にむけて実践される共通のアプローチであると考えている（Halliday and Webster 2013: 143-144）。この文脈で用いられる applicable ないし applying を日本語でどのように訳すかは、特に定まっていないようである。Halliday の本義に沿って考えれば、この概念を支える発想法は‘apply-’の「実現・実体・実践・実用」であり‘-able’の「可能・能力・万能・効能」であることに鑑み、「実能」のような造語をつくるのもよいかもしれない。しかし、訳語については、それ自体、SFL の全体像を見渡して案出すべき重要な問題であり、ここでは暫定的に「実現可能」としておく。
- <sup>3</sup> たとえば Caffarel *et al.* (2004: 6ff)を参照。
- <sup>4</sup> Halliday and Fawcett (1987)。
- <sup>5</sup> Halliday によって展開された言語研究の革新性については、Fawcett (2008: 10)に端的なまとめがある。一般的に、形式主義の立場から機能主義との違いを論じた著述はあまり見られないようである。このことから、機能主義は形式主義との対立軸をなすもうひとつのアプローチとして派生的に発展したような観があるかもしれない（高見 2000: 125）。しかし、機能主義言語学の興りそのものがそのようなコンテキストで捉えられるかといえば、決してそうではない。たとえば Halliday は自著において繰り返し強調してきたように、SFL の先駆けとして重大な影響を及ぼしてきた概念には、L. Hjelmslev の階層 (stratification)、プラーグ学派の V. Mathesius が提唱した「主題・題述」構造、E. Sapir と B.L. Whorf の言語相対説、および Malinowski が主唱した「状況のコンテキスト」、そして J.R. Firth の「体系」や「プロソディー分析」などがあり、基本的に社会科学の一領域として発展してきた（Halliday 1978:5）。
- <sup>6</sup> SG と CG の詳細については、Fawcett (2000)を参照。また、SG と CG を含め、より広い観点から機能主義的構造言語学を比較研究した著述は、Butler (2003a; 2003 b)を参照。
- <sup>7</sup> たとえば Fawcett *et al.* (1993)を参照。
- <sup>8</sup> 実際にテキストの産出および理解がどれだけの段階をへて実現されているかについては、本論文執筆時点において断定的に述べることはできない。現在、もっとも有効とされる方法のひとつは、コンピュータに実装された人工知能によって人間さながらの自然言語処理プログラムを開発することである。
- <sup>9</sup> 8 つの織については、Funamoto (2014)を参照。
- <sup>10</sup> 「どうもそうらしい」のように、内容の蓋然性をめぐる話し手が伝聞や推論等にもとづく判断のありようを表明する形式や、「どうも熱が下がらない」のような否定表現とともにもちいる用法は、考察の対象としない。
- <sup>11</sup> コーパスを単なる用例の集積としてではなく、言語使用域による確率を文法記述に導入した最も包括的な文献としては、Biber *et al.* (1999)を参照。
- <sup>12</sup> たとえば Stubbs (1996: 35)は、アメリカ構造言語学が文法から意味を切り離し、実例の使用も排したことによって、結局は意味をもてあましてきた問題にふれ、「どうすれば意味を最もうまく扱えるかは、概念上でなされる分析の方法論というよりも、テキスト分析と分布分析の技法にかかっている」と結論づけている。
- <sup>13</sup> たとえば、Halliday (1976a)、Matthiessen (1995)、Halliday & Matthiessen (1999)、Martin & White (2005)を参照。
- <sup>14</sup> 片岡 (2012) 参照。
- <sup>15</sup> Lyons (1995: xii and 6)
- <sup>16</sup> 日本においても、かつて漢字を用いた書記体系が中国から伝播され、それとともに仏教や政治的思想などが持ち込まれ、その影響を強く受けた。しかし、鈴木 (1944/2010)

によれば、外来の宗教文化を日本人が受容する過程において何が起こったかといえ、それ以前から日本社会において培われてきた民族固有の原始的意識の覚醒をうながし、鎌倉時代（12世紀末から14世紀初頭）に宗教意識の顕現という形で「日本的霊性」が発動せられたという。

#### 参考文献

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G.N., Conrad, S. & Finegan, E. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Butler, C.S. 2003a. *Structure and Function: A Guide to Three Major Structural-Functional Theories, Part I Approaches to the Simplex Clause*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Butler, C.S. 2003b. *Structure and Function: A Guide to Three Major Structural-Functional Theories, Part II from Clause to Discourse and Beyond*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Caffarel, A. 2006. *A Systemic Functional Grammar of French: From Grammar to Discourse (with a Preface by M.A.K. Halliday)*. London: Continuum.
- Caffarel, A, Martin, J.R., and Matthiessen, C.M.I.M. 2004. 'Introduction: Systemic functional typology'. In A. Caffarel, J.R. Martin, and C.M.I.M. Matthiessen (eds.). *Language Typology: A Functional Perspective*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 1-76.
- Fawcett, R.P. 1988. 'What makes a "good" system network good?: Four pairs of concepts for such evaluations'. In J.D. Benson and W.S. Greaves (eds.). *Systemic Functional Approaches to Discourse: Selected Papers from the 12th International Systemic Workshop*. Norwood, N.J.: Ablex, 1-28.
- Fawcett, R.P. 2000. *A Theory of Syntax for Systemic Functional Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Fawcett R.P. 2008. *Invitation to Systemic Functional Linguistics through the Cardiff Grammar: An Extension and Simplification of Halliday's Systemic Functional Grammar, Third Edition*. London: Equinox.
- Fawcett, R.P., Tucker, G.H., Lin, Y.Q. 1993. 'How a systemic functional grammar works: The role of realization in realization'. H. Horacek and M. Zock (eds.). *New Concepts in Natural Language Generation: Planning, Realization and Systems*. London: Pinter, 114-86.
- Funamoto, H. 2014. 'The interface between culture and mind: A systemic functional account of nominality'. 北陸大学紀要 38,51-80.
- Halliday, M.A.K. 1976a. *Halliday: System and Function in Language* (Edited by G. Kress). Oxford: Oxford University Press.
- Halliday, M.A.K. 1976b. 'The teacher taught the student English: An essay in applied linguistics'. In P.A. Reich (ed.). *The Second LACUS Forum 1975*. Columbia: Hornbeam Press, 344-349.
- Halliday, M.A.K. 1978. *Language as Social Semiotic: The Social Interpretation of Language and Meaning*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. 1993. 'Systemic Theory'. In R.E. Asher (ed.-in-chief). *Encyclopaedia of Language and Linguistics*. Oxford: Pergamon Press, 4505-8.
- Halliday, M.A.K. 1985a. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. 1985b. 'Systemic Background'. In J.D. Benson and W.S. Greaves (eds.). *Systemic Perspectives on Discourse, Volume 1: Selected Papers from the 9th International Systemic Workshop*. Norwood, N.J.: Ablex, 1-15.
- Halliday, M.A.K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar, Second Edition*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M.A.K. (Revised by C.M.I.M. Matthiessen). 2014. *Halliday's Introduction to*

- Functional Grammar, Fourth Edition*. London: Routledge.
- Halliday, M.A.K., McIntosh, A. & Stevens, P. 1964. *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. London: Longman.
- Halliday, M.A.K. and Stevens, P. 1966. *Patterns of Language: Papers in General, Descriptive and Applied Linguistics*. London: Longman.
- Halliday, M.A.K. and Fawcett, R.P. 1987. 'Introduction'. In M.A.K. Halliday and R.P. Fawcett (eds.). *New Developments in Systemic Linguistics, Volume 1: Theory and Description*. London: Frances Pinter, 1-13.
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. 1999. *Construing Experience through Meaning: A Language-Based Approach to Cognition*. London: Cassell Academic.
- Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. 2004. *An Introduction to Functional Grammar, Third Edition*. London: Arnold.
- Halliday, M.A.K. and Webster, J.J., (ed.). 2013. *Halliday in the 21st Century (Volume 11 in the Collected Works of M. A. K. Halliday)*. London: Bloomsbury.
- 井筒俊彦 1983/91. 『意識と本質：精神的東洋を求めて』東京：岩波書店
- 井筒俊彦 1985. 『意味の深みへ：東洋哲学の水位』東京：岩波書店
- 片岡啓 2012. 「言語哲学：アポーハ論」高崎直道（監修）、桂紹隆、斉藤明、下田正弘、末木文美士（編）『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』東京：春秋社、189-226.
- Lavid, J. and Zamorano-Mansilla, J.R. 2012. *A Systemic Functional Grammar of Spanish: A Contrastive Study with English*. London: Continuum.
- Li, E.S. 2007. *A Systemic Functional Grammar of Chinese: A Text-Based Analysis (with a Foreword by Fang Yan)*. London: Continuum.
- Lyons, J. 1995. *Linguistic Semantics: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Martin, J.R. and White, P.R.R. *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. New York: Palgrave.
- Matthiessen, C.M.I.M. 1995. *Lexicogrammatical Cartography: English Systems*. Tokyo: International Language Sciences Publishers.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G.N. & Svartvik, J. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Stubbs, M. 1996. *Text and Corpus Analysis*. Oxford: Blackwell.
- 鈴木大拙 1944/2010. 『日本的靈性（完全版）』東京：角川書店
- 高見健一 2000. 「機能的構文論」小泉保（編）『言語研究における機能主義：誌上討論会』東京：くろしお出版、125-169.
- Teruya, K. 2007. *A Systemic Functional Grammar of Japanese, 2 Volumes*. London: Continuum.